



なんでもねん

発行責任者 倉橋 忠



No.30

弥生時代の幕開け

稲作 と 新しい道具 が伝わった

1 稲作は、どこから日本列島に来たのか

イネは亜熱帯性の植物であり、日本列島には自生しない。どこから伝わったのであろうか。かつてはイネの原産地は、インドのアッサム地方から中国の雲南地域の一帯であると考えられてきた。しかし、近年の考古学の定説は、稲作の起源地を中国の長江の中・下流域とする¹。8000年前のジャポニカ米(日本で栽培される種類の米)の炭化米が、中国河南省の賈湖遺跡や湖南省の彭頭山遺跡で大量に発掘されたからである²。

けれども、長江の稲作起源地から、どのルートを通して日本列島に伝わったのかは、未だ謎のままである。

この点については、これまで、A「南西諸島を経由するルート」、B「直接に海を渡って日本列島にたどりついたとする渡海ルート」、C「山東半島～朝鮮半島を経由するルート」、D「山東半島～遼東半島～朝鮮半島を経由するルート」、E「中国東北部～朝鮮半島を経由するルート」の5つのルート案が考えられてきた。このうち、次のような理由で、今日ではCかDのルートが有力な考え方になっている。

日本列島で最も古い弥生早期の灌漑水田跡は、福岡市板付遺跡・野多目遺跡などがある。それらの遺跡には、鋤・鍬などの木製農具や、石庖丁などの穂摘み具、木製農具の製作に用いる伐採・加工用の斧類があった。その水田跡の構造や、穂摘み具・斧類の特徴は朝鮮半島南部と共通点が多く、さらにこれらの穂摘み具と形態が類似する資料は朝鮮半島北部から遼東半島方面にまで年代を遡りながら追跡できる³。



*1 石川日出志『農耕社会の成立』岩波新書 2010年 p.59。

*2 土肥鑑高『米の日本史』雄山閣出版 2001年 p.13。

*3 前掲、石川日出志『農耕社会の成立』p.61。

2 稲作と同時に伝わった道具

【稲作の手順】

稲作の農作業の手順は、弥生時代から現代までほとんど変わらない。つまり、弥生時代に稲作が伝えられた時には、農作業の手順は完成していたのである⁴。

稲作の平均的な一年間の農作業の流れを整理すると、耕耘・整地→施肥→播種・田植え・（間引き・中耕除草・防

虫）→収穫→運搬・乾燥→貯蔵→脱穀・調整の各段階になる。

【農作業と農具】

稲作と同時に、農具も伝わり、各作業段階に応じて使い分けられていた。農具の材質や形はその後変化するものの、道具としての機能はあまり変わっていない⁵。

◎ 耕耘・整地と鍬・鋤 … 播種(種をまく)の前に耕地を整える「田拵え」と呼ばれる作業がある。この時、開墾や水路の掘削などの土木工事に使用された、最も基本的な農具は鍬と鋤である。弥生時代の鍬は刃先まで木製で、アカガシ、イチイガシ、シラカシなど硬類の硬い材質を用いていたが、弥生後期になると、鉄板の刃先を装着したものも現われた。鋤は、手足の力を使って地面をすくい起こす耕作具で、シャベルやスコップの原形である。弥生時代の鋤の身は刃先まで木製のため、深く掘り起こすには不向きだが、当時の水田は、田下駄や田舟を一部で必要とするような水位の高い軟土の水田がほとんどであったため、木製農具でも実用可能だった。

◎ 播種・田植えと田下駄 … これまで、弥生時代では、まだ田植えのような高等技術はとられておらず、直播が行われていたとされてきた。しかし、近年では、弥生時代に田植え技術が伝わっていたと考えられるようになってきている。田下駄(大足)が田植え前の施肥(肥料を入れること)の際にも使用された道具であることや、岡山県百聞川原尾島遺跡の弥生後期の水田跡からは、田植えが行われたことを示す稲株の配列跡が発見されたからである。

◎ 収穫と石包丁・鎌 … 収穫期を迎え、稔った穀物の穂や茎を刈り取る作業で使われたのが、穂摘具や鎌である。弥生後期になると鉄鎌が出てくるが、それまではも



石包丁

っぱら石製の穂摘具である石包丁が用いられた。石包丁は大陸系磨製石器の一つで、西日本で多く発見される。



*4 前掲、土肥鑑高『米の日本史』p.24。

*5 前掲、土肥鑑高『米の日本史』p.25。